# 12. 明 治 時 代

**明治時代に入ると、わが国は東京を中央とする近代的な統一国家を作り始め、平成時代にいたっています。**

**さて、明治の世から今日(こんにち)まで門司の人々が中央からの呼びかけや働きかけのもとで、どのような考えで中央に応じながら、暮らしてきたでしょうか。**

慶応(けいおう)4（1868）年、これまでの江戸幕府に代わって、天皇を中心とした新しい政府ができました。

新しい政府は、江戸を東京と改めて、日本の首都に定め、年号も慶応から明治と変えました。慶応4（明治元）年から明治45（大正元）年までの期間を明治時代といいます。

## (1) 江戸時代から明治の世の中へ

### ○　武家政治の終わり

門司の地で展開された長州藩と小倉藩の戦いは、長州藩の勝利に終わりました。

慶応3（1867）年正月、両藩は和議を結び、企救郡（今の門司区と小倉北南両区の一部を合わせた区域）と小倉城は、長州藩が支配するところとなりました。

小倉藩を負かした長州藩と、西郷隆盛が指揮する薩摩藩（鹿児島県）が手を結ぶと、幕府を倒そうとする考えが一気に高まり、「尊皇(そんのう)(王)倒幕」が全国的に流行しました。

「尊皇倒幕」というのは、幕府の政治をやめさせ、天皇を中心とする政府をつくろうとする考えのことです。

この年の10月、徳川15代将軍の慶喜(よしのぶ)は、政権を京都の朝廷に返しました。これを「大政奉還(たいせいほうかん)」といいます。

ここに、江戸幕府は倒れ、源　頼朝が鎌倉に幕府を開いてから、およそ670年も続いた武家政治は、終わりを告(つ)げました。

○　**企救郡百姓一揆**

「世直し」と称して、全国各地で騒動が続発する中で、凶作（米や麦の実りが大変に悪いこと）が企救郡一帯を襲い、農民は食料に苦しんだまま、明治２（1869）年と年があらたまりました。

人々の政治に対する不満は、門司の農民の間でも、次第に大きくなっていきました。

前年は、暴風雨や日でり続きと天候が不順で、夏の麦、秋の稲の実りが極端に悪く、農民は苦しい生活にあえいでいました。しかし、政府は年貢を少なくすることはありませんでした。それどころか、役人が庄屋などと一緒になって年貢を横取りしたという噂が流れたものですから、農民の怒りは頂点に達したのです。

企救郡内の村々では、ひそかに一揆の話がささやかれていました。

小倉藩が治める企救郡では、江戸時代 260 余年の間、一度も一揆は起こりませんでした。江戸時代の終わりごろは、全国各地で百姓一揆がたくさん起きたのに、なぜ企救郡では一度も起きなかったのでしょうか。

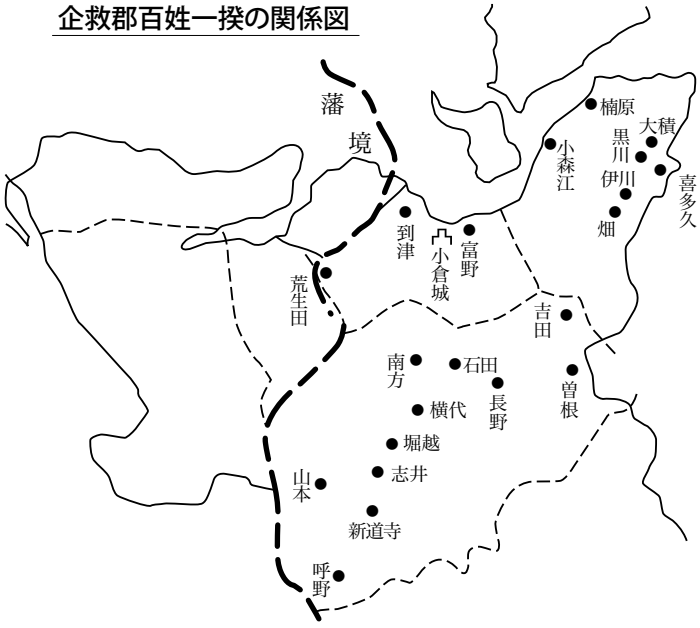
それは、一揆を起こさせないように、小倉藩が農民たちを治める定めを特別につくっていたからだと思われます。

その定めを「小倉藩御条目」といいます。藩は、27 の条文を定め、藩内の庄屋など村役人と農民にきつく守らせました。

ところが、幕末のこの頃になると、小倉藩のねらいとは逆に農民たちが、一揆を起こして立ち上がろうとしたのですから、彼等の怒りと不満は、かつてないほどに高まっていたと言えます。

企救郡内のあちこちの村で百姓一揆が起こり、郡内は、農民の怒り一色に塗りつぶされました。

**企救郡百姓一揆の関係図**




門司の各村でも、11 月 21 日に一揆が起きました。楠原村（今の門司港地区）では庄屋宅を打ち壊し、そこから山越えして周防灘側の大積、喜多久、黒川に入り、火などをつけて気勢を上げました。さらに伊川、畑へとくりだしました。

新道寺村から端を発し、企救郡一円に吹き荒れた明治２年 11 月の一揆は、その代表となった原口九右衛門と主だった９名が処罰されて終わりました。

## ○　日田県から福岡県の門司に

明治の新政府は、諸大名と領地・人々を切り離すために、明治２（1869）年６月に、「版籍奉還」を諸大名にさせました。

「版」というのは領地・土地のことで、「籍」というのは人々のことです。「奉還」とは、うやうやしい態度で天皇にお返しするという意味です。

政府は、これを実施した後、天皇の名の下に、大名をかつて自分が支配していた版（藩）の知藩事に任命しました。

さらに、その年の７月、「廃藩置県」の実施を断行しました。

「廃藩」とは、「藩」という今までの呼び名をなくして、「県」のよび名にするということです。○○藩は、これによって、○○県となりました。

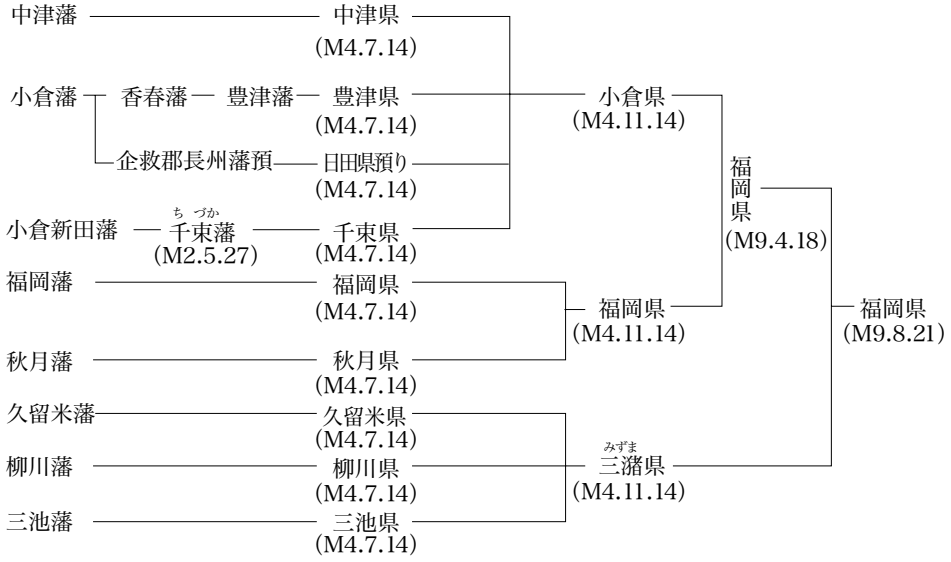
企救郡は、長州藩が支配していた地でしたから、小倉県とはならず、日田県の一部となりました。

日田県は江戸時代、大名が支配する藩ではありませんでした。天領といわれて、江戸幕府が役人（代官）を江戸から派遣して直接に治めた所でした。ですから、この時期は日田県の一部として編入されていたのです。

企救郡百姓一揆のあと、長州藩は企救郡から手を引いたので、長州県とするわけにはいきませんでした。ですから明治４（1971）年２月、門司は日田県預かりの形となりました。門司は日田県の跳び地の姿になったのです。

その年の 11 月、企救郡は小倉県となり、門司は小倉県の一部となりました。

そして、５年後の明治９（1876）年４月、小倉県は福岡県と合併して、その県名を失い、今のようになりました。




福岡県が成立していく過程

## ○　学制の実施

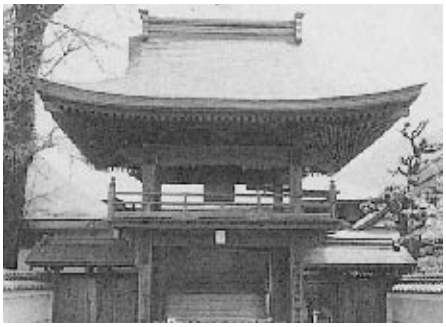
新政府は、明治５（1872）年８月、「学事奨励ニ関スル被仰出書」を発表して、国民の教育の面でも近代化を進めようとしました。

江戸時代の終わりごろ、科学では欧米諸国の足元にも及ばなかった日本ですが、厳しい身分制度の社会であったにもかかわらず、読み・書き・計算の教育が広く普及していました。

武士階級の子弟は主に、学問（漢文や歴史、武士としての心構え）を藩校で学び、庶民の子女は寺子屋や先生（師匠）の家で生活に役立つようにと、男子は主に文字やそろばんを、女子は、裁縫や三味線、作法を学んでいました。

門司では、田野浦村の真楽寺や大里村の仏願寺で、寺子屋教育が行われていました。

真楽寺



仏願寺

学制が始まった頃の授業風景

学制を発表した翌年の明治６（1873）年、学制がどの程度ゆき渡っているかについて調査が行われました。この時の全国統計によると、小学校の就学の割合は、男児約 40%、女児約 16%という低いものでした。その大きな理由は、授業料が親にとって大きな負担だったということです。

小学校に通う割合が男女ともに 90%を越えたのは、明治 38 年頃で、明治 40 年代になって、やっと学制の目的を達するほどまでになりました。

学制の実施によって、門司には小学校が建てられ、１人ないし２人の教師が、20 名から 50 名ほどの児童に授業を行いました。

学制を実施した明治５年に開校された小学校は、日成（大里村）、田野浦（田野浦村）、白野江（白野江村）、柄杓田（柄杓田村）、大積（大積村）、門司（門司村）、楠原（楠原村）でした。次いで、７年には、馬寄（馬寄村、新町村）が開校されました。

## ○　年貢から地租へ

明治の新政府が日本の近代化を進めた政策の一つは、国内に欧米式の近代産業を国（政府）の責任でおこすというものでした。これを「殖産興業」といいます。

これには多額の資金が必要でしたから、新政府は、明治６（1873）年７月、地租改正を公布（国民全体に知らせること）しました。

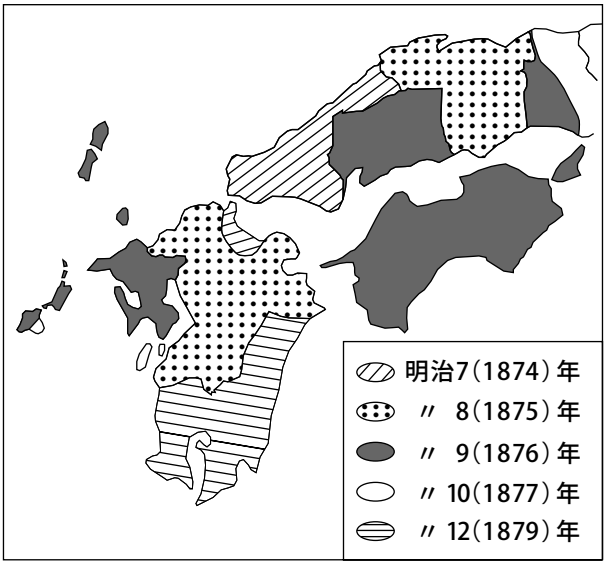
「江戸時代の年貢制度を改めて、地価（耕作地の値段）の３分（３％）を税として現金で地主が納める」と発表したのです。政府が公布した内容は次のようなものでした。

一、　今までの田畑の収穫高から、「地価」に変える。
一、　地租は地価の百分の三とし、豊作凶作の別なく毎年一定とする。
一、　地租を納める者は、地券を交付されている地主・自作農民とする。
一、　地租は金納（お金で納めること）とする。

門司で地租改正が実施されたのは、翌年の明治７（1874）年のことで、福岡県内で最初でした。

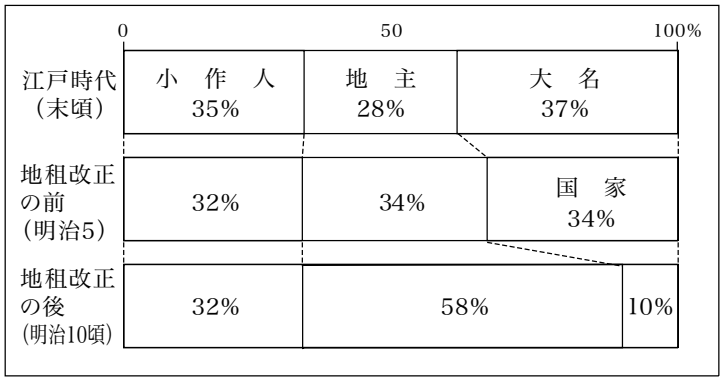
当時の農民の多くは、地主農民でなくて小作農民でしたから、これが公表されると、小作農民たちは自分たちの負担が江戸時代に比べると減るだろうと期待しました。

ところが、江戸時代から田畑を借りて耕作していた農民（小作農民）が、その地主に納めていた小作料を地主が軽くしませんでしたので、地租改正で地主は太り、小作農民には恩恵が少ないという結果をもたらしたのでした。




地租改正の進みぐあい

地租改正前後における米の取り分




左のグラフから、どのようなことに気付きますか。

江戸時代末期と明治10年頃を比べると、地主農民の収入は急激に伸びました。逆に、小作農民は目減りです。

国の場合も大きく減っていますが、それは表向きで、実は、その裏には、こんなからくりがありました。

江戸時代の各藩は、藩内で徴収した年貢米の一部を大坂（「坂」が「阪」の字になったのは、明治４年です）に送って、お金にかえていました。地租改正では現金で徴収しましたから、初めからお金が国（政府）に入ってきます。ですから、その手間が省けます。

また地租は、耕作地にかかる税金でしたから、豊作、凶作の別なく、毎年一定のお金が国に入ってきます。ですから、国（政府）は見通しを立てて事業を計画し実施できました。

地券

地租改正に対する農民の不満は、急激に高まっていきました。そして、その不満は、地租を納める義務を負っている自作農民をもまきこんで、一揆へと進みました。

“地租改正反対農民一揆”は、早くも、明治６（1873）年６月13日に福岡県の筑豊地方の一角（今の嘉穂郡庄内町）で起こりました。これを「筑前竹槍一揆」といいます。

当時の福岡県の人口は約46万で、このうちの約30万の群衆が、“地租改正反対”“学制反対”などと叫びながら、手に手に竹槍や棒などを持って、福岡県庁に押しかけたのです。７月５日、一揆は軍と警察の手でしずめられました。

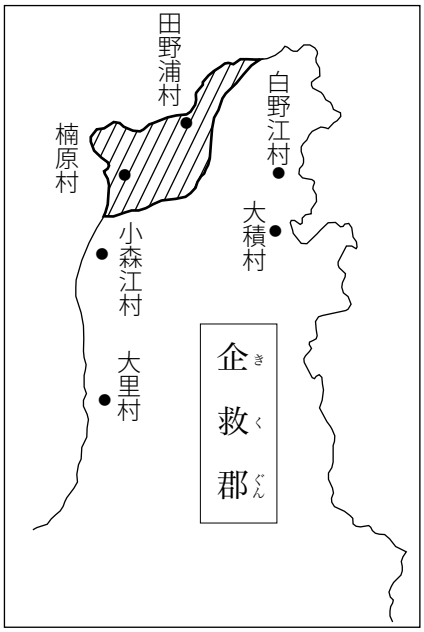
このような、門司の外で起こった一揆の情報は、門司の人々の耳にも達しました。しかし、筑前竹槍一揆が起こった年は、まだ門司では地租改正が実施されていませんでしたから、門司の人たちにとっては、この一揆は今一つピンとこなかったようです。しかし、それでも一揆勢は、一部が小倉の方面から門司の村々にやって来て、乱暴をはたらいたということです。

この騒動がきっかけとなって、明治９（1877）年までの間、“地租改正反対農民一揆”が全国的に続発しました。

## (2) 近代化に突き進んだ門司

### ○　港づくりから駅づくりへ

門司の地は、大坂の陣（1615年）の後、徳川家康の命令で門司城が取り壊されて以来、約250年もの間、さびしくひっそりとしていました。




江戸時代末頃の門司

この地には、古代から朝鮮半島と中国大陸とを西日本・東日本に結びつけた海上交通の中継地としての役を果してきました。

また、九州の陸上交通の起点と終点の地として、古代から江戸時代を通して、物と人の往来に役立ってきました。

このような地理上の特色を生かして、“文明の利器”としての鉄道を福岡県に最初に走らせたいという地元の人たちの願いが生まれ高まったのは、明治5（1872）年に、新橋（東京都）と横浜（神奈川県）の間に鉄道が開通した後のことでした。

福岡の地に鉄道を、という熱情が頂点に達したのは、明治19（1886）年の頃でした。

その様子を、当時の福岡日々新聞（今の西日本新聞）は、次の記事を載せて、県民に応えました。

福岡県知事　安場保和
（西日本新聞社提供）

「鉄道造らざれば九州の財動かず、鉄道敷かざれば九州の知開けず…」

何が何でも鉄道を、という声に耳を傾けながらも、「門司に港こそ先に」という信念を抱いていた人がいました。第8代の福岡県知事「安場保和」です。

その安場さんの、北部九州に鉄道を建設するという考えに、明治の新政府が援助するという内々の話を受けて、明治18（1885）年、福岡に着任した安場知事は、鉄道の起点をどこにするかと県内を見回って、その年の10月に門司に立ち寄りました。

門司ヶ浜に立った知事は、「門司に港を造れば、国運は高まるに間違いない。だから、港と鉄道をこの地で直結させるのだ。」と決意しました。

この頃、地元の村民は港づくりに賛成しており、後は、港を造る会社が必要となりました。

明治22（1889）年、渋沢栄一、浅野総一郎等の当時の財界の指導者たちが会社の株主として名を連ねて、「門司築港株式会社」を誕生させました。

築港会社は、その年の７月から埋め立て工事に着手しました。

４か月後の11月には、港がまだ完成していないにもかかわらず、門司港は、外国貿易港の仲間入りを果たしました。石炭・米・麦・硫黄・小麦粉の５品目の特別輸出港として国が指定したからでした。

九州では、長崎、博多の港に次いで３番目の指定でした。後、この３番目の港が、九州一、そして、全国で５本の指に入るほどの成長を遂げることになりました。

埋め立て工事は、明治23（1890）年度中に完了し、約８万坪（約26ヘクタール）の土地が、門司に加わりました。

港づくりで、元々の門司の姿が変わっていくのと同時に、鉄道をこの地から起こそうとする動きも活発になってきました。

**0マイル地点**

**明治24年開業した門司駅の旧駅舎**

県民の間に広がる声に合わせるように、明治13（1880）年、当時の福岡日々新聞社（今の西日本新聞社）は、次のような記事を掲げて広く県民に訴え（アピール）ました。

「九州の産業を起こし、文明の恩恵を広げるためには、鉄道の建設が必要なのであります。」

県民の声と新聞記事の後押しは、ついに福岡県会（今の福岡県議会）を動かしました。

明治18（1885）年、福岡県会は政府に対して、門司（今の門司港地区）を起点にして熊本までの鉄道を建設したいと申請しました。

スミヤカニ先ズ豊前門司ヨリ肥後熊本ニ達スル鉄道ノ線路ヲ選定セラレ、本県国県道路ノ修築更正ヲシテ徒労空費ニ属スルノ憂ヒナカラシメ給ハンコトヲ

- 大意…一刻も早く、まず、門司から熊本までの鉄道の路線をどう通すかを決めて、併せて県内の道路の整備をしてほしい。わたしどもの願いが空しいものにならないように、意を用いて下さい。

しかし、政府は、地元の声にはなかなか応じようとはしませんでした。福岡県会が申請した路線の建設は、政府が国の事業として行おうと考えていたからです。

それでも、政府は県民の情熱に折れて、明治21（1888）年６月、門司を起点とする鉄道建設の許可を出しました。地元福岡県会では、工事を始めるために、その年の８月に九州鉄道会社をつくりました。そのための費用は、三菱・三井という東京で活躍する会社や筑豊や北九州の麻生氏・安川氏が経営する会社が出しました。

今の門司港駅舎

明治24（1891）年４月１日、県民待望の開業記念の特別列車が、鹿児島本線の起点であり終点でもある門司駅（今の門司港駅）に、石炭の黒い煙を出しながらゆっくりと止まりました。

列車には、九州鉄道会社の社長をはじめとした来賓にまじって、門司港生みの親である安場知事が乗っていました。

この夜おそくまで、門司港地区の空には、祝福の花火が上がり続けていました。

開業当時の門司駅は、桟橋通りバス停横にある山口銀行の裏あたりにありました。

今の駅舎が、今の場所に建ったのは、大正３（1914）年で、門司港駅と名乗ったのは、昭和17（1942）年でした。

### ○　門司港を支えた「ごんぞう」たち

石炭は、当時、世界の各国にとって、近代産業に欠くことのできない重要なエネルギーでした。門司港が扱った石炭は、福岡県内の筑豊の炭鉱で働く男女の汗と力によって地底から掘り出されていたものでした。

筑豊の大部分は福岡藩の領地でしたが、小倉藩でも領内の田川郡で、文政年間（1818～29年）に石炭を掘り出して、藩の特産品の一つとしていました。

明治時代に入ると、石炭の利用が増大しました。

筑豊の炭鉱から掘り出された石炭は、「川艜」と呼ばれた川舟で、遠賀川を下って河口の芦屋（遠賀郡）に運ばれたり、遠賀川の下流から堀川運河を通って若松に送られたりしていました。

門司駅（今の門司港駅）が開業した８月には、筑豊本線（若松～直方間）が開業して鹿児島本線

の折尾駅と結ばれました。さらに、田川線（行橋〜伊田間）も同じ頃に開通しました。

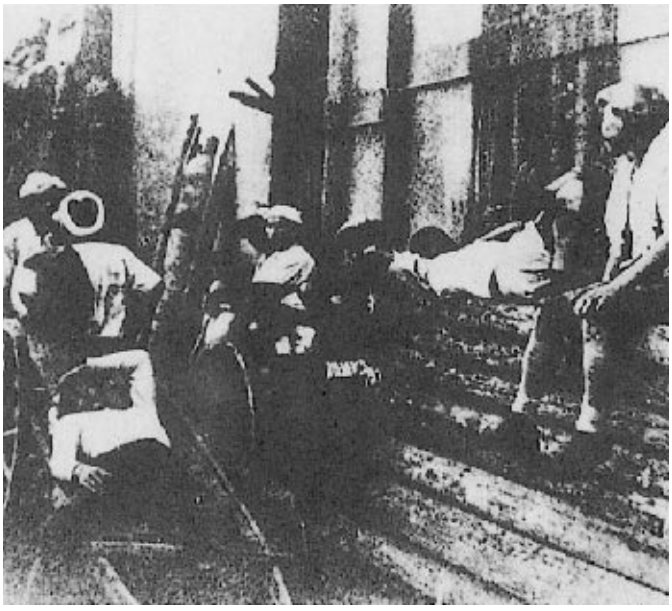
すると、若松と芦屋に集められていた筑豊の石炭は、折尾駅を中継して門司駅に輸送され、門司港の岸壁から輸出されるようになりました。

明治 29（1896）年頃には、門司港は、石炭輸出で全国 1 位を占め、その量も全国で扱う石炭量の半数近くを送り出すという盛況ぶりを示しました。

埋め立て地には、三菱・三井・住友・浅野といった中央（東京）の石炭商社が軒を連ねていました。また、大阪商船などの船会社も進出していました。

この門司港の石炭輸出の盛況を支えた人たちが、「ごんぞう」と呼ばれた港湾労働者でした。

岸壁に高く積まれた石炭を「はしけ」と呼ばれる小型の木造船に積み込む作業、沖に停泊して、横付けして、貨物船に今度は「はしけ」から積みかえる作業が、「ごんぞう」と呼ばれた人たちの仕事でした。



**港湾労働者“ごんぞう”たち**

ごんぞうたちは、「沖仲仕」とも言われました。

石炭のはしけへの積み込みと、はしけから本船への積みかえ作業に従事した「ごんぞう」の始まりは、港づくり・駅づくりによって、塩田で塩づくりの仕事をしていた人たちや九州と本州の各地から働きにきた人たちでした。

特に、下関・広島・大分などの近県からどっと人が集まってきました。

最盛期には、6 千人に近いごんぞうたちは石炭の黒い粉を体にまぶして、急ぎの作業の時には、昼夜ぶっ通しで働きました。

○　**村から町に、町から市に**

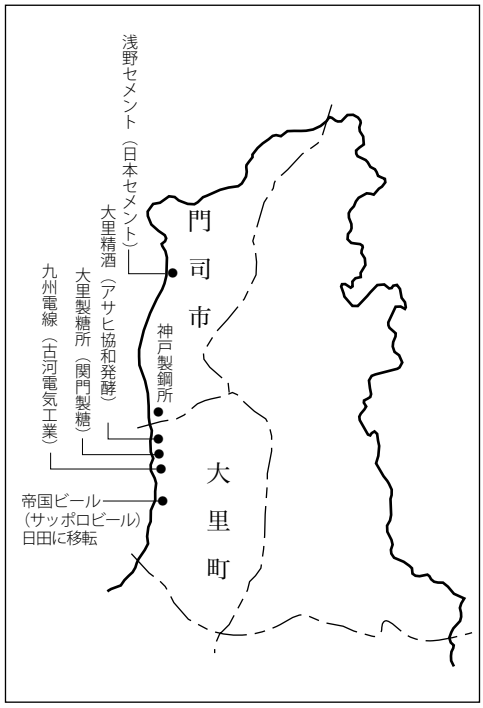
昭和38（1963）年２月に、門司・小倉・戸畑・八幡・若松の５市が合併して北九州市が誕生しました。

門司が「市」の名乗りを上げたのは、明治32（1899）年４月のことでした。次いで、翌年には小倉が、大正時代に入って若松、八幡、戸畑が順に市になりました。このため、門司の人々は、北九州で最も早く市になったという誇りと自慢を強くいだきました。

明治の新政府が、日本を欧米風の近代国家につくり上げていくために、市町村制を実施しました。そのために、江戸時代の藩境をまずなくし、地方政治の長を政府が選ぶという形をとりましたから、この市町村制の実施は、いわば、「第２の廃藩置県」でもあったのでした。

明治時代を迎えたその時、門司は、楠原郷の１町３村（田野浦町・田野浦村・楠原村・門司村）から成っており、明治元（1868）年当時、戸数は562、人口は2719人で、総面積は約11.３平方キロメートルでした。そして、明治20（1887）年に、柳郷の中の小森江村を合わせて１町４村が合併して、門司村を名乗りました。

明治の新政府は、明治21（1888）年に、地方制度をより確かなものにするために、「市制・町村制法」を公布しました。




**門司・大里に進出した工場**

門司村はこの法によって、明治22（1889）年に、「文字ヶ関村」という名になりました。

港の整備が進み、鉄道が門司駅を起点にして扇のように広がっていくと、三菱・三井の商社や大阪商船などの船会社、浅野セメント工場、安田・日本・住友・三井といった銀行や郵便局が続々と門司駅周辺に進出してきて、文字ヶ関村は活気を帯びてきました。

明治27（1894）年に、戸数は2315、人口は10076人とふくれ上がった文字ヶ関村は、門司町となり、古くからの地名である「門司」をその町名としました。

さらに、明治32（1899）年４月１日、北九州で最初、県内では３番目の市になりました。

門司市の西の柳ヶ浦村は明治41（1908）年に大里町となり、工場の目立つ町として発展していきました。

大里町では、明治37（1904）年に、大里製糖所（今の関門製糖）、明治44（1911）年に大里製粉所（今の日本製粉）や九州電線（今の古河電工）、明治45（1912）年に帝国ビール（今のサッポロビール。日田市に移転）というように、鉄道の走る海岸沿いに工場地帯を形づくっていきました。

その後、大正・昭和の時代は、港と駅と工場とを結びつけながら産業都市に発展しつつ、後年、門司市の栄光を支えていくことになりました。

**門司市と東郷村を結んだ桜トンネル**

大里町での工業の発達は、原料と製品の輸送の面で、港と駅とをもつ門司市とのつながりを強めていきました。そして、門司市と大里町は大正12（1923）年2月1日に合併しました。

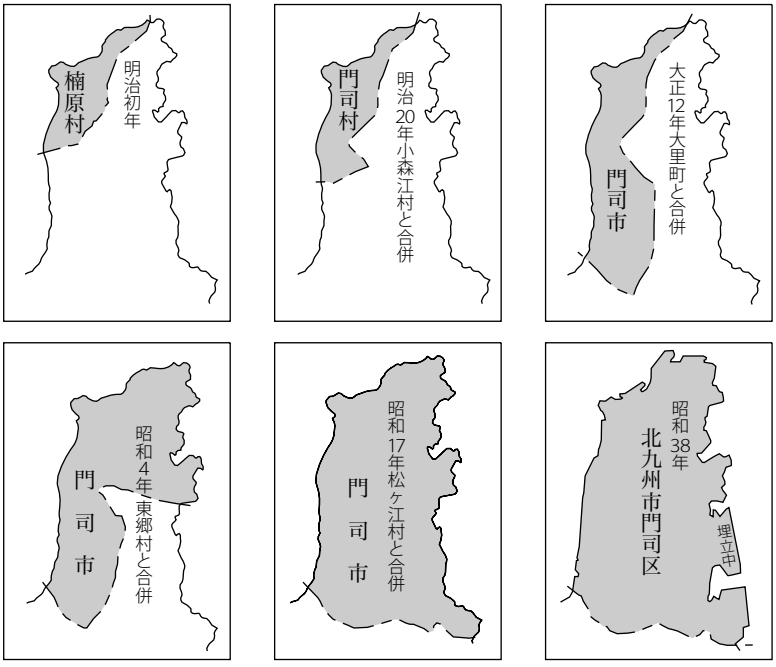
大里町に次いで、昭和4（1929）年4月1日東郷村が門司市に合併しました。

これより先、大正3（1914）年5月、桜トンネル（正しくは「桜隧道」）が開通し、門司市と東郷村の双方の人と物の行き来がとても便利になりました。門司市と東郷村の合併は、桜トンネルがとりもった縁でした。

昭和17（1942）年5月15日に門司は、松ヶ江村と合併しました。

面積は66.7平方キロメートル、人口は約15万2千人になりました。

こうして、元々の門司が、周辺の町や村と合併を進めながら、企救半島のほぼ全域を門司市の市域としたのでした。




**門司市と他の村との合併の移り変わり**

## (3) 日清・日露戦争と門司

### ○　日清戦争と門司

門司が町となった明治27（1894）年、日本と清国（中国）との間に、朝鮮半島での勢力争いをめぐって、日清戦争が起こりました。

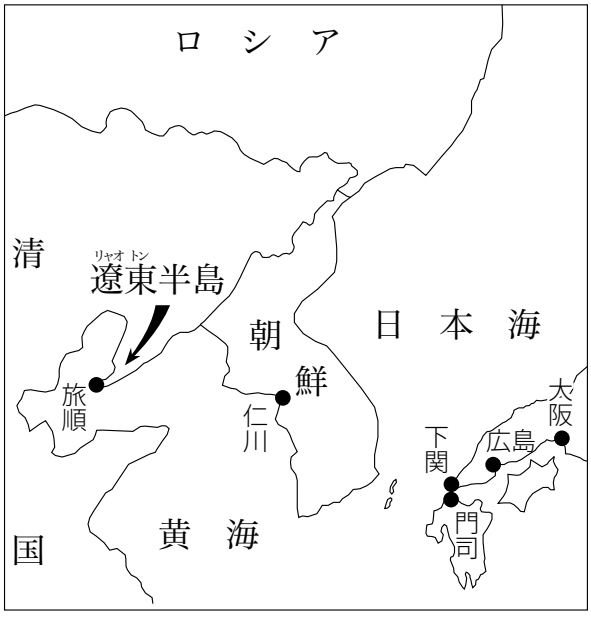
当時、日本が最も恐れていたのが、となりの清国でした（以下、清国を清とする）。

清は、朝鮮国を支配下にし、アジア最強の海軍といわれた北洋艦隊を黄海に配置していました。日本は、この艦隊によって海から攻撃されることを何よりも恐れていたのでした。

「関門海峡を清の艦船が自由に航海するようなことになったら、広島や大阪が危うい。海峡の防御をすべし。」

政府は、全国の沿岸の守りを固める中で、門司と下関を守ることが最も重要と考えました。

明治20～28年、清の北洋艦隊に備えて、門司の笹尾・古城・矢筈の山々や和布刈、小倉の手向山、下関などに砲台を築きました。そして、弾丸の飛ぶ方向は、すべて海峡に向けられました。

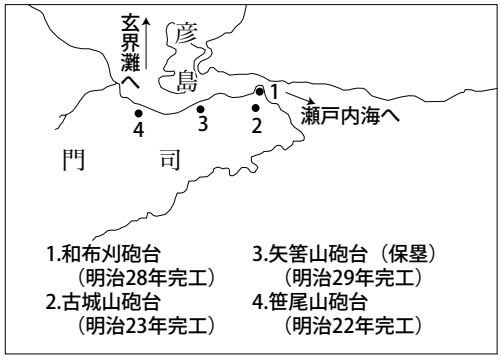



清と門司の位置関係

明治27（1894）年7月、清との戦争が始まると、9月24日には、当時、小倉城にあった陸軍の歩兵第14連隊の兵士たちは、門司港から朝鮮国の仁川に渡りました。そして、北上を続けて行きました。

11月21日には、旅順の攻撃軍に加わりました。

旅順の要塞は、清の誇る軍備の一つでした。それが、3日間で日本軍によって占領されることになりました。




門司に配置された砲台

この戦争は、翌28年4月に日本の勝利で終わり、下関の春帆楼で、講和条約が結ばれました。

この条約によって、清は朝鮮の独立を認めること、銀2億テール（当時のお金で3億6500万円）の賠償金を日本に支払うこと、台湾島・遼東半島の一部などを日本領とすることが約束されました。

門司港から船出して戦場に向かった小倉歩兵第14連隊

の将兵たちは、明治28年のその年６月に、門司港にもどってきました。

門司に設置されていた砲台は、この戦争では使われませんでしたが、10年後に役立つことになりました。

### ○　幻の大里製鉄所

日清戦争勝利の喜びもつかの間、ロシア・ドイツ・フランスの３国が、条約の内容に干渉してきました。日本が遼東半島をもつことは、東アジアの平和を乱すものだから、すぐに清国に返すように要求してきたのです。これが「三国干渉」といわれているものです。

日清戦争が終わったばかりの日本は、この３国を敵にまわすととても勝ち目がないと思い、この要求を受け入れることになりました。

そして、外国に対抗するためには、軍事力をつけなければならないと考え、兵をきたえ、軍備を整える一方で、清からの賠償金の一部で、欧米式の製鉄所建設を国の手で行うことにしました。工業の中心である鉄の生産を外国に頼っていては、いつまでも外国に追いつかないという考えがあったからです。

明治28（1895）年の暮れ、製鉄所建設の予算が、帝国議会で承認されました。総予算額650万円、年間生産量９万トン、技術はドイツに頼り、燃料になる石炭は国内産、原料の鉄鉱石は中国、生産開始は明治32年から、という計画でした。

明治29年３月、建設予定地が政府によって選ばれました。その候補地は、青森・釜石・塩釜・千葉・品川・鶴見・静岡・和歌山・尾道・呉・大竹・海田・柳ヶ浦（門司）・板櫃（小倉）・八幡・大牟田・長崎などでした。

候補地となった各地では、自分たちの地元に近代的な製鉄所を、という意気込みで、誘致運動を繰り広げました。

建設地の条件は

・広大な建設用地が安く手に入る

・海上と陸上の交通の便がよい

・原料と燃料が手に入りやすい

という３点でした。

調査団は候補地を見て回り、次の４ヵ所にしぼりました。呉・柳ヶ浦・板櫃・八幡でその中から呉が原料と燃料（石炭）の入手の視点で落ちて、北九州の３ヵ所が残りました。そして、明治30

**製鉄所予定地とされたあたり（今の大里地区）**

（1897）年２月に建設予定地が八幡村と決定され、柳ヶ浦村は、涙をのみました。

筑豊炭田が近くにあり、アシ（ヨシともいう。竹やススキに似た水辺の植物）などが生い茂る湿地が多い土地という点では、両村ともに同じ条件でした。働く者の数では、人口の多い柳ヶ浦村のほうが勝っていたのですが、当時、八幡村の村長をしていた芳賀種義さんの熱意と村民たちの協力の面で、また、予定地が地価の半額ほどというのが、八幡村が建設地に決まった要因のようです。

### ○　日露戦争と門司

三国干渉によって手放した遼東半島にある旅順に、ロシアは、当時では世界最強といわれる要塞と軍港を築いて、中国と朝鮮半島に次第に勢力を伸ばしてきました。日本にとって中国や朝鮮国は、日本の軽工業製品（衣類や生糸など）の大切な輸出先でしたので、このロシアの進出はたいへん困ったものでした。

このことに加え、明治34（1901）年２月に八幡製鉄所が開業し、原料になる鉄鉱石を旅順に近い中国の大連から輸入していた事情から、ロシアの勢力を東アジアから除く必要を日本は感じていたのでした。

このような状況の中で、中国や朝鮮国の玄関口である門司港の港には、外国航路の大型船が物資と旅客を運んでいましたので、門司は大いににぎわっていました。ですから、ロシアの中国・朝鮮半島への進出は、門司と大陸のつながりを切ることにつながりかねないことが予想されるので、貿易でにぎわっていた門司にとっても好ましいことではなかったといえるでしょう。

明治30年の中ごろになると、国内では、「ロシアをやっつけろ」という声が次第に大きくなってきました。そして、明治37（1904）年、日露戦争が始まりました。

小倉の陸軍第12師団の将兵２万2000人は、門司と長崎の港から戦地へと向かいました。

門司には、すでに笹尾山（今の鳥越バス停南側の丘陵）に、10門の大砲が設置されていました。明治29（1896）年、矢筈山に９インチ砲４門と15センチりゅう弾砲６門が新たに設置され、関門海峡を守ることになりました。

朝鮮国の仁川に上陸した第12師団の将兵たちは、第一軍に編入されました。そして、北へ進撃して、ロシア陸軍が守る奉天（今の瀋陽）

手向山砲台跡

を目指しました。

一方、乃木希典大将の率いる第三軍は、旅順制圧に向かっていましたが、強力な要塞となっていたロシア軍に大苦戦を強いられていました。

乃木軍は、要塞を攻撃しますが、ロシア軍は当時の最新兵器の機関銃で反撃をし、日本軍に多くの死傷者が続出しました。乃木は、旅順攻略の糸口を「二百三高地」（203メートルの山を日本軍がこう名づけた）に求めました。二百三高地を手に入れ、そこに大砲をすえて弾丸を撃ち込めば、要塞は落ちると考えたのでした。

敵も味方も大変な戦死者を出す激しい戦いの末、明治37（1904）年、二百三高地は乃木軍の手に落ちました。

乃木希典

二百三高地は手に入れたものの、大型の大砲と弾丸が全く不足していました。そこで、門司の笹尾山の大砲２門が解体され、乃木軍に送られたといわれています。二百三高地に送られた大砲は、旅順と港に停泊しているロシア軍艦にめがけて、巨大な弾丸をとばしました。

明治38（1905）年、旅順は落ち、ステッセル軍は降伏しました。一方、満州に進撃した小倉師団の将兵らの日本軍は、次第にロシア軍を北方に退けていきました。

ロシア軍の犠牲は大きく、多くの兵士が捕虜となりました。日本軍も、戦死者を多く出し、弾も武器も不足するようになりました。

一方南太平洋上では、世界最強といわれたロシアのバルチック大艦隊が、日本に向かっていました。ときの、連合艦隊司令長官の東郷平八郎は、バルチック大艦隊が対馬と朝鮮の間を通るのか、鹿児島の南を通って東京湾に向かうのか、その判断に迷っていました。両方のコースに備えて、艦隊を２つに分けては対抗できないと考えた東郷は、対馬沖を通ると判断して、全艦隊を集中させました。東郷は、自分がバルチック大艦隊の司令長官ならこのコースを通ると考えたからでしょう。東郷のこの判断は的中しました。

門司の山の大砲は、砲身を関門海峡に向けて、万一に備えました。

東郷の軍とバルチック艦隊は、対馬沖でぶつかりました。

日本軍の撃ち出す砲弾はよく命中し、ロシアの大艦隊のほとんどが、海底に沈んでしまいました。そして、ここでも、ロシアの兵士が捕虜となりました。

このときの陸と海の戦いで、捕虜となったロシア将兵の一部は、門司で収容されることになり、明

ロシア兵捕虜収容所のあったところ
今の神鋼メタリック

小森江捕虜収容所でのロシア兵の仮装大会

治 38（1905）年、今の神鋼メタリック（小森江）の敷地内に収容所が造られました。

明治 38（1905）年、アメリカのポーツマスで、講和条約が結ばれ、日露戦争は終わりました。

戦後、捕虜をロシアに送還し終えた明治 39（1906）年 10 月に収容所は、閉鎖されました。